

〔学術論文〕

夏目漱石『坊っちゃん』の文字表記と語種

——カタカナの使い方をめぐって——その2

Scripts and the Word Classes by their Origins in Natsume Soseki

“Botchan”: the Usage of Katakana——Part 2

成 田 徹 男

Narita Tetsuo

要旨 本稿では、明治期以降の日本語資料において、カタカナの占める位置は、どのようなものか、ということを見るために、手始めとして夏目漱石の『坊っちゃん』を対象とし、漱石が、『坊っちゃん』という作品の表現手段のひとつとして、カタカナをどうつかったか、あるいはどうつかおうとしたかを考える。全体の構成は次のようである。「0. はじめに 1. 『坊っちゃん』のカタカナ表記語 2. 語種と、表記の字種との関係1——外来語の、表記の字種(以上前稿「その1」)」以下、3. 語種と、表記の字種との関係2——和語の、表記の字種 4. 「笑い」について 5. 漱石の表記態度 6. おわりに

が、本稿「その2」の対象部分である。

「3. 語種と、表記の字種との関係2——和語の、表記の字種」では、和語として分類したカタカナ表記語のうち、「生き物：バッタ、ゴルキ、イナゴ、モモンガー（4語）」について、カタカナ表記されている理由を、読みやすい漢字表記がないこと、などと推測した。また、擬態語や和語の疊語は原則としてカタカナ表記されないこと、擬音語にもひらがな表記の例が多いことを指摘し、笑い声を除く擬音語について、カタカナ表記されている理由を、高い鋭い音が意識されているためではないかと考えた。「4. 「笑い」について」では、「アハハハ」は山嵐、「エヘヘヘ」は野だいこ、「ホホホホ」は赤シャツというように、笑い声の特定のカタカナ表記が、主要な登場人物につかわれ、その人物の性格描写と関連していることを指摘した。「5. 漱石の表記態度」では、語種を基準とした機械的な文字のつかいわけはしていない、という点と、和語のカタカナ表記は、かなり意図的なものである可能性が高い、という点を指摘した。漱石の表記態度には、現代の日本語話者の表記態度に通じるものがある、と考えられる。

キーワード：文字、表記、カタカナ、語種、表記意識

### <前稿「その1」について>

前稿「その1」の「0. はじめに」では、目的と、底本について説明し、「1. 『坊っちゃん』のカタカナ表記語」では、『坊っちゃん』につかわれている、カタカナ表記語の用例は、延べで336語、異なりでは57語であったこと、57語を分類すると、「外来語固有名詞」が「マドンナ、ターナー」など7語、「外来語普通名詞」が「シャツ、ハイカラ、パイプ、ランプ、ウイッチ、テーブル」など27語、「和語」の「生き物」が「バッタ、ゴルキ、イナゴ、モモンガー」の4語、「和語」の「擬音語」が「アハハハ、ホホホホ」など12語、「和語」の「その他」が7語となったことを述べた。また、「2. 語種と、表記の字種との関係1——外来語の、表記の字種」では、外来語についてみると、外来語は主としてカタカナ表記されているものの、外来語でありながらカタカナ表記されていない場合があったこと、「シャツ」「ハンケチ」と「襦袢」「手巾」という両様の表記がみられる語もあったこと、そして、このような表記が存在するのには、それなりの理由が考えられることを述べた。

### 3. 語種と、表記の字種との関係2——和語の、表記の字種

「その1」で述べたように、和語として分類したカタカナ表記語は、「生き物：バッタ、ゴルキ、イナゴ、モモンガー（4語）」、「擬音語：アハハハ、ホホホホ、チュー、ハハハハ、エヘヘヘヘ、ハハハハハ、ジュ、チーン、ヒュー、ピュー、ヘヘヘヘ、ワー（12語）」、「その他：ケ、イカサマ、カ、掛ケ合う、ヘボ、ペテン、ヤ（7語）」の、計23語である。ここでは、「生き物」「擬音語」、そして、とりわけ笑い声について考えてみたい。和語の表記は、「漢字」または「ひらがな」または「両者の交ぜ書き」がふつうであるから、カタカナ表記された場合は、それなりの理由があるはずだと考えられる。

#### 3.1. 生き物の表記

「生き物」に関して、『坊っちゃん』のなかでは、「蚊」「鮒」「鯉」「犬」「猫」「猿」など、さらに植物もふくめると「栗」「竹」「松」「柳」など、漢字表記がふつうである。「冬瓜」「人参」は漢語、「唐茄子（とうなす）」（「かぼちゃ」のことである）は漢語と和語との混種語で、漢字表記されるのは当然のことであろう。では、なぜ「バッタ」「ゴルキ」「イナゴ」「モモンガー」は、カタカナ表記なのか。

「ゴルキ」は、坊っちゃんが初めて聞いた魚の名称である。しかも、松山あたりでの通称という設定であり、「ゴーリキー」にかけたものでもあるから、カタカナ表記する必然性がある。一般的に、「バッタ」には「飛蝗」「蝗」など、「イナゴ」には「蝗」「稲子」「蝻」のほかさまざまな漢字表記が存在する。『坊っちゃん』では、坊っちゃんが「バッタ」と称する虫を、生徒が「イナゴ」と呼ぶ、という食い違いのおもしろさと、坊っちゃんが田舎の生徒にばかにされたと感じる滑稽さをえが

くことに主眼がある。よみにくい漢字表記、あるいは煩雑なふりがなをつけた漢字表記ではなく、ひと目で違いがわかるようにカタカナ表記を選択したのではないか。

「モモンガー」の用例は、次の例文(13)にある(例文番号は「その1」からの通し番号)。

- (13)「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被《ねこっかぶ》りの、香具師《やし》の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

九 「岩波」116「直筆」114「DS」669

「モモンガー」は、『日本国語大辞典第二版』(小学館)によると、ひとつは、リス科モモンガ属の哺乳類の意で、「鼯鼠」と漢字表記し、「ももんが」「ももんぐわあ」、または「ももんじい」という語形もあるらしい。古くは別種の「ムササビ」と混同されて、ムササビも「鼯鼠」と漢字表記されるそうである。そして、「化けもの」を意味したり、さらに転じて人をののしる表現としてつかわれたりするという。『坊っちゃん』の用例は、明らかにののしりである。しかも、「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師」の後であるから、カタカナ表記は当然であろう。

### 3.2. 擬音語の表記

次に「擬音語」をとりあげる。カタカナ表記は、実際に音があるものに限られ、いわゆる擬態語はカタカナ表記されていないことはすでに指摘した。擬態語、そして擬態語とも言えない量語の表記例としては、「いよいよ」「うじゃうじゃ」「うとうと」「ぎゅうぎゅう」「ぐいぐい」「くさくさ」「ぐらぐら」「ぐるり」「こせこせ」「ごろり」「ざらざら」「すたすた」「ずたずた」「すとん」「すらすら」「そこそこ」「そろそろ」「ぞろぞろ」「たまたま」「だらだら」「ちらちら」「とうとう」「どきり」「ぬるぬる」「ねちねち」「のそのそ」「ぴかぴか」「びりびり」「ひろびろ」「びんびん」「ぷつり」「ぶらぶら」「へらへら」「ほんやり」「もともと」「ゆるゆる」「よろよろ」「わざわざ」などがある。また、「愈々(いよいよ)」「色々」「折々」「時々」「中々」と漢字表記された和語の量語形副詞も散見する。「段々」「滔々」「堂々」「明々白々」などは、漢語であって、当然、漢字表記されている。「いよいよ」と「愈々(いよいよ)」のようなひらがなと漢字との表記のゆれはあるものの、擬態語などをカタカナ表記する例はない。

「擬音語」の場合、つまり、音がある、あるいはあってもおかしくない場合でも、カタカナ表記でなく、ひらがな表記されている例がかなりみられる。人の声、特に笑い声については後で考察することとし、ここでは、それ以外についてみてみよう。

- (14) きこの敷石の上を車でがらがらと通った時は、無暗《むやみ》に仰山《ぎょうさん》な音がするので少し弱った。

二 「岩波」18「直筆」16「DS」93

(15) からんからんと駒下駄《こまげた》を引き擦《ず》る音がする。

十一 「岩波」147「直筆」143「D S」843

(16) おれはここまで考えたら、眠《ねむ》くなったからぐうぐう寝《ね》てしまった。

六 「岩波」60「直筆」60「D S」351

(17) 玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。

十一 「岩波」150「直筆」146「D S」858

(18) ごろごろと五分ばかり動いたと思ったら、もう降りなければならない。

二 「岩波」16「直筆」14「D S」81

(19) やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がった。

二 「岩波」16「直筆」15「D S」84

(20) するとこの時まで隅《すみ》の方に三人かたまって、何かつつる、ちゅうちゅう食ってた連中《れんじゅう》が、ひとしくおれの方を見た。

三 「岩波」30「直筆」29「D S」168

(21) この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒《たお》れても構わない。

四 「岩波」36「直筆」36「D S」208

(22) すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れていたのが、急に静まり返って、人声どころか足音もしなくなった。

四 「岩波」41「直筆」41「D S」237

(23) 鯉《かつお》の一匹ぐらい義理にだって、かかってくれるだろうと、どぼんと錘と糸を抛《ほう》り込んでいい加減に指の先であやつっていた。

五 「岩波」50「直筆」50「D S」290

(24) 清の事を考えながら、のつそつしていると、突然《とつぜん》おれの頭の上で、数で云ったら三四十人もあろうか、二階が落っこちるほどどん、どん、どんと拍子《ひょうし》を取って床板を踏みならす音がした。

四 「岩波」41「直筆」40「D S」234

(25) おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱《かか》えたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云ったら、金《かね》や太鼓《たいこ》でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちきりん。叩いて廻って逢《あ》われるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりと叩いて廻って逢いたい人がある、と二た息にうたって、おおしんど云った。

九 「岩波」119「直筆」116「D S」681-682

(26) 法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚《ぐ》な事を長たしく述べ立てるから、寝る時にどンドン音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末《そまつ》なんだ。

四 「岩波」36「直筆」36「D S」207

- (27) 赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬっと立ち上がったから、おれは嬉《うれ》しかったので、思わず手をぱちぱちと拍《う》った。

九 「岩波」114「直筆」111「D S」653

- (28) ひゅうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨《ほおほね》へ中《あた》ったと思ったら、後ろからも、背中を棒《ぼう》でどやした奴がある。

十 「岩波」134「直筆」130「D S」767

- (29) ぶうと云《い》って汽船がとまると、舳《はしけ》が岸を離《はな》れて、漕《こ》ぎ寄せて来た。

二 「岩波」15「直筆」13「D S」75

- (30) 蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。 四 「岩波」44「直筆」43「D S」251

- (31) 「貴様のような奸物はなぐらなくっちゃ、答えないんだ」とぼかばかなぐる。

十一 「岩波」151「直筆」147「D S」863

- (32) 「もうたくさんか、たくさんでなけりゃ、まだ撲《なぐ》ってやる」とぼかばかんと兩人《ふたり》でなぐったら「もうたくさんだ」と云った。

十一 「岩波」151「直筆」147「D S」864

- (33) この男がやがて、いやあ、はああと呑気《のんき》な声を出して、妙な謡《うた》をうたいながら、太鼓をほこぼん、ほこぼんと叩《たた》く。

十 「岩波」131「直筆」128「D S」752

- (34) 水際から上げるとき、ぼちゃりと跳《は》ねたから、おれの顔は潮水だらけになった。

五 「岩波」51「直筆」50「D S」293

- (35) 次はぼんと音がして、黒い団子が、しょっと秋の空を射抜《いぬ》くように揚《あ》がると、それがおれの頭の上で、ばかりと割れて、青い烟《けむり》が傘《かさ》の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。

十 「岩波」130「直筆」127「D S」746

このほかに、例文(13)の「わんわん鳴けば犬も同然な奴」という表現もある。つまり、擬音語でもひらがな表記がふつうなのであって、擬音語がカタカナ表記されるというのは、かなり限られた場合である。人の声以外で、カタカナ表記された例は、次のものである。

- (36) 君 | 釣《つり》はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝《ね》ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草《まきたばこ》を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀《ろ》の足で掻き分けられた浪《なみ》の上を揺《ゆ》られながら漾《ただよ》っていった。

五 「岩波」54「直筆」54「D S」315

- (37) チーンと九時半の柱時計が鳴った。 十一 「岩波」146「直筆」143「D S」838

- (38) 挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。

九 「岩波」115「直筆」112「D S」661

- (39) 港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛《ふえ》がヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯《いそ》の砂へざぐりと、舳《へさき》をつき込んで動かなくなった。

五 「岩波」58「直筆」57「D S」335

- (40) やがて、ピューと汽笛《きてき》が鳴って、車がつく。

七 「岩波」89「直筆」88「D S」517

例文(20)の「ちゅうちゅう」と例文(38)の「チュー」、例文(28)の「ひゅう」と例文(39)の「ヒュー」の存在から考えて、実際にはそれほど音の違いがあるとは考えにくい。しいていえば、(37)の柱時計の音と(40)の汽笛の音は、かなり高い音のように感じられる。鋭い、高い音にカタカナ表記をあてようとしたのかもしれない。

#### 4. 「笑い」について

『坊っちゃん』には、笑いに関係する表現がかなりある。「おかしい」が「可笑しい」と表記されている例もあるし、「にやにや」という擬態語や、「人を笑う」「人に笑われる」という表現もある。登場人物もよく笑うが、その笑い声の叙述には、かなり漱石の意図的な表記がふくまれると考えられる。その点を中心に、以下で具体的に見ていくことにする。

##### 4.1. 人の出す声の表記

『坊っちゃん』の中では、笑い声以外の、人の出す声の表記は、ひらがながふつうである。

- (41) えへんえへんと二つばかり大きな咳払《せきばら》いをして席に着いた。

九 「岩波」114「直筆」111「D S」657

- (42) こう考えて、いやいや、附《つ》いてくると、何だか先鋒《せんぼう》が急にがやがや騒《さわ》ぎ出した。

十 「岩波」124「直筆」121「D S」712

- (43) 勘太郎は四つ目垣を半分崩《くず》して、自分の領分へ真逆様《まさかさま》に落ちて、ぐうと云った。

一 「岩波」4「直筆」2「D S」10

- (44) それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云った話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免職《めんしょく》する考えだなと云った。

九 「岩波」109「直筆」106「D S」627

笑い声以外で、カタカナ表記された、人の出す声の例は、(45)の「ワー」だけである。しかし、その後に示す例文(46)(47)(48)にあるように「わあ」「わっ」というひらがな表記もある。特に、カタカナ表記する理由は思いあたらない。

- (45) 命令も下さないのに勝手な軍歌をうたったり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関《とき》の声を揚《あ》げたり、まるで浪人《ろうにん》が町内をねりあるいてるようなものだ。  
十 「岩波」122「直筆」119「D S」699

- (46) しかしたしかにあばれたに違いないがと、廊下の真中《まんなか》で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまって響《ひび》いたかと思う間もなく、前のように拍子を取って、一同が床板《ゆかいた》を踏み鳴らした。  
四 「岩波」42「直筆」41「D S」241

- (47) おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわっと云う関の声がして、今まで穏《おだ》やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかに波を打って、右左りに揺《うご》き始める。  
十 「岩波」132「直筆」129「D S」759

- (48) 野だはよっぽど仰天《ぎょうてん》した者と見えて、わっと言いながら、尻持《しりもち》をついて、助けてくれと云った。  
十一 「岩波」150「直筆」146「D S」858

#### 4. 2. 笑い声の表記

カタカナ表記された笑い声については、「アハハハ、ホホホホ、ハハハハ、エヘヘヘ、ハハハハハ、ヘヘヘヘ」があった。同じカナ文字が続く場合、自筆原稿では2つめ以降は繰り返す符号である。なお、「ヘヘヘヘ」は、自筆原稿では、ひらがなかカタカナか判別できない。青空文庫や岩波文庫では、カタカナのフォント、活字が用いられているようなので、ここではカタカナ表記例としておく。

- (49) 人が丁寧《ていねい》に辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給《きたま》えアハハハと云った。何がアハハハだ。  
二 「岩波」21「直筆」20「D S」113

- (50) 帰りがけに、君何でもかんでも三時 | 過《すぎ》まで学校にいさせるのは愚《おろか》だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑ったが、あとから真面目《まじめ》になって、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕《ぼく》だけに話せ、随分《ずいぶん》妙な人も居るからなと忠告がましい事を云った。  
三 「岩波」26「直筆」25「D S」146

- (51) 山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかったのだと聞いた。  
九 「岩波」107「直筆」105「D S」617

- (52) エヘヘヘ大丈夫ですよ。聞いたって……と野だが振り返った時、おれは皿《さら》の

ような眼《め》を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやった。

五 「岩波」54「直筆」53「DS」313

(53) おれがあきれ返って大きな口を開いてハハハハと笑ったら眼が覚めた。

二 「岩波」17「直筆」15「DS」87

(54) 二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜《くぐ》って、角屋の中へはいった。

十一 「岩波」147「直筆」144「DS」846

(55) 「天麩羅《てんぷら》……ハハハハハ」

五 「岩波」53「直筆」52「DS」307

(56) おれはそんな呑気《のんき》な隠居《いんきょ》のやるような事は嫌《きら》いだと云った  
ら、亭主はへへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませんが、  
いったんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付《てつき》  
をして飲んでいる。

三 「岩波」27「直筆」26「DS」152

(57) それから神楽坂《かぐらざか》の毘沙門《びしゃもん》の縁日《えんにち》で八寸ばかりの  
鯉《こい》を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったがこれ  
は今考えても惜《お》しいと云《い》ったら、赤シャツは顔《あご》を前の方へ突《つ》き  
出してホホホホと笑った。

五 「岩波」46「直筆」45「DS」266

(58) あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちゃ。いい画が出来ますぜと  
野だが云うと、マドンナの話はよそうじゃないかホホホホと赤シャツが気味の悪い笑  
い方をした。

五 「岩波」49「直筆」48「DS」281

(59) 赤シャツはホホホホと笑った。

五 「岩波」57「直筆」56「DS」329

(60) 赤シャツがホホホホと笑ったのは、おれの単純なのを笑ったのだ。単純や真率が笑わ  
れる世の中じゃ仕様がな。清はこんな時に決して笑った事はない。大いに感心して聞  
いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

五 「岩波」57「直筆」57「DS」331

「アハハハ」は山嵐専用、「エへへへ」は野だいこの一例、「ホホホホ」は赤シャツ専用である。「ハ  
ハハハ」は、坊っちゃん自身の例と、野だいこと赤シャツの二人が出す笑い声の例、「ハハハハハ」  
は、野だいこと赤シャツの二人が出す笑い声の例、「へへへへ」は亭主（「いか銀」）の笑い声の例  
である。

笑い声が、ひらがな表記されている例もある。

(61) 伊万里だって瀬戸物じゃないかと、云ったら、博物はえへへへへと笑っていた。

九 「岩波」112「直筆」109「DS」644

(62) こんな事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。



五 「岩波」53「直筆」52「D S」304

(63) それでなければああいう風に私語合《ささやきあ》ってはいくすくす笑う訳がない。

十一 「岩波」137「直筆」134「D S」790

(64) 仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚《あ》げたら、生徒がわあと囃《はや》した。

三 「岩波」26「直筆」24「D S」141

(65) おれの顔を見てみんなわあと笑った。

三 「岩波」30「直筆」29「D S」170

(62) (63) は、野だいこと赤シャツの二人の笑い声であるが、実際の笑い声というより、「にやにや」のような擬態語に近い表現ではないか。(61) の「博物」と(64) (65) の「生徒」は、主要登場人物ではない。また、「生徒」は、特定されない多人数である。

ともに一例ずつではあるが、野だいこには「エヘヘ」とカタカナ表記を、博物には「えへへへ」とひらがな表記をあてているのは、偶然とは思えない。笑い声の表記は、漱石の、登場人物の性格描写の一部とみなすべきであろう。「アハハハ」は、山嵐の豪放磊落さを、「ホホホホ」は、赤シャツの上品ぶったうさんくささを、「エヘヘ」は、野だいこの下卑たへつらい根性を、端的にあらわし、読者に印象づけているのである。

ちなみに、校長の狸や、下女の清、マドンナについては、笑う場面があるのだけれども、笑い声は表現されていない。マドンナが登場する場面は次の部分である。

(66) ところへ入口で若々しい女の笑声が聞《きこ》えたから、何心なく振《ふ》り返ってみるとえらい奴が来た。

七 「岩波」88「直筆」86「D S」509

マドンナの笑い声が具体的にどのようなものであったのか、読者は想像するしかない。想像するしかないからこそ、いいのかもしれない。

## 5. 漱石の表記態度

以上のように、『坊っちゃん』における、カタカナ表記を中心にした表現を見てくると、漱石には、ある一定の表記態度が存在しているように思われる。

まず、第一に、語種を基準とした機械的な文字のつかいわけはしていない、という点が指摘できる。漢語についてはほぼ漢字表記であるが、外来語については、カタカナ表記を主としながらも、漢字表記が一般的であったと思われるものは漢字表記している。ふりがなのつけ方もふくめて、読者が読みやすいように、わかりやすいように、という配慮が感じられる。和語については、ひらがな、漢字、または両者の交ぜ書きが大部分ではあるものの、漢字表記しにくいもの、動物名、擬音語、特に笑い声については、カタカナ表記をもちいている。ここにも、読者に対する配

慮が感じられるし、表現においてカタカナの特性を生かそうとする意識もほの見える。

第二に、和語のカタカナ表記は、かなり意図的なものである可能性が高い、という点がある。擬態語や擬音語の多くはひらがな表記であるのに、擬音語の一部についてだけカタカナ表記しているし、特に笑い声のカタカナ表記は、作品の根幹である主要登場人物の性格描写にもかかわるものであるからである。

また、興味深いのは、「ズボン」「ずぼん」のような、表記のゆれが見られることである。外来語でもひらがな表記される場合があるのであるから、語種とは別の基準があると考えるのが自然であろう。

## 6. おわりに

『坊っちゃん』における、という限定付きではあるが、漱石の文字表記態度には、全般として、「その1」の「はじめに」に示した「現代日本語話者の表記戦略(仮説)」にかなり近いものが感じられる。語種よりも、どのような意味の語であるか、その表記を選ぶときの表現意図は何か、ということが優先されているからである。現在の日本語話者の、表記態度の淵源は、漱石につながっている。明治はけして遠くはない。

付記：本学大学院生の浅川充弘氏から、「掛け合う」の「ケ」について、自筆原稿では変体仮名、つまりひらがな表記である可能性があるのではないか、との指摘があった。本稿では、青空文庫の本文でカタカナであるものを、カタカナ表記語としたが、自筆原稿の表記、変体仮名をふくめた用字法については、検討の余地がある。

### 【参考文献】(「その1」と同じ)

- 秋山 豊 [2007] 「自筆原稿を「読む」たのしみ」夏目漱石 [2007] 集英社 所収  
今野真二 [2007] 『消された漱石 明治の日本語の探し方』笠間書院  
夏目漱石 [2007] 『直筆で読む『坊っちゃん』』集英社 (集英社新書ビジュアル版)  
成田徹男・榊原浩之 [2004] 現代日本語の表記体系と表記戦略 『名古屋市立大学大学院人間文化研究科 人間文化研究』第2号 p.41-55